

## 紀要創刊——新しい一步を踏み出すにあたって

小野正人（農学部 学部長）

玉川大学は、旧制最後の大学として昭和22（1947）に設置認可された。当時の学部は「文農学部」であり、創立者が「国家の土台となる農」に携わる人材育成をもって、本学の建学の精神を具現化した学部とし、高等教育への第一歩を踏み出されたことが偲ばれる。その2年後、新制大学令により『農学部』が開設され、「全人教育」の理念のもとで研究教育活動が展開された。農学科の一学科体制で、総合農学という見地から幅広い活動が展開されていた。その中で玉川らしいチャレンジングな取り組みが、当初からなされている。植物保護の分野で当時、旧七帝大を始め、ほとんどの大学の農学部では、農作物（食料）の生産性を損なう害虫を防除する研究が盛んに行われていたが、玉川では後発隊としてそれに参じるのではなく、日本では注目されていなかった益虫、とりわけミツバチの研究に挑戦したのである。玉川のミツバチ研究は、以来65年間以上に亘る地道な取り組みにより国内外で知られるところとなっている。さらに、昭和30年代にはいるとコスモスの新花色について出口の见えない長い育種学的研究が開始され、30年後の昭和62（1987）年に、遂に世界初の黄色い花色の新品種「イエローガーデン」として登録をみている。2つの伝統的な例を挙げたが、農学部の先達の研究活動には、常に多くの学生諸氏が卒業研究として真摯に取り組み、主体的、協働的な学修が展開され、力をつけて玉川の丘を巣立ち、社会の要職に就かれて活躍している卒業生も数多である。

以上のような農学部の研究成果公表の媒体として、昭和35（1960）年に「玉川大学農学部研究報告」が発刊され、教員と学生との共著論文も多数掲載されてきたが、平成17（2005）年に第45号の刊行をもって、幕を閉じている。それから10年間以上の歳月が流れ、その間に新校舎（サイエンス・ホール）の竣功をはじめとして、農学部の研究と教育環境は大きく様変わりした。教員と学生とのコミュニティーという基軸は継承されつつ、社会情勢の変化に応じて研究と教育の内容は先端的で高度化され、発信すべき情報が湧き出るように急増している。21世紀の100年間を人類が生き抜く鍵を握る問題の一つに安全で安心な食料生産があるが、玉川大学では閉鎖環境で光、空気、水など環境要因を先端的な科学技術をもって制御し、野菜（LED農園）や水産資源（アクア・アグリステーション）を生産するシステムの構築に着手している。「研究」だけでなく、「教育実践」、北海道弟子屈農場、鹿児島南さつま久志農場、箱根自然観察林、生産加工室、カナダナナイモ校地などの諸活動を「業務報告」という形で網羅的にまとめて、エビデンスとして掲載する媒体の存在が必須となってきた。21世紀に人類が抱えている食料生産、環境保全、エネルギー確保など「生きていくこと」に直結する課題は、全て農学につながっており、それらの解決にはESTEAM教育を念頭に置いた国際的、学際的な取り組みこそが必要になってくる。

ここに「玉川大学農学部研究教育紀要」を創刊し、教員と学生の織りなすコミュニティー活動により叶えられた「夢」の一つひとつを刻み、さらにそれが「社会貢献」として、もう一つの夢につながっていく機能を担うことを期待している。